Close-up Interview（2月号 表紙の顔）

寺下 智香 TERASHITA CHIKA

「優勝は毎年の目標だけど、去年までは それを口に出して言える状態ではなかった」

2014年、デビューイヤーの女子新人戦で初優勝を飾り、翌15年にはビッグトーナメントのラウンドワンカップ・レディースを制して、瞬く間にトッププロの仲間入りを果たした寺下プロ。しかし19年のJPBA★SSSカップで6勝目を挙げたのを最後に“優勝”の二文字から遠ざかっている。昨年の全日本女子プロ選手権ではトップシードで準V敗退。その悔しさをバネに、プロ10年目の節目を迎えた今季に捲土重来を期す――。

PHOTO：早浪章弘（撮影地・尼崎市街）

P★リーガーとしてのキャッチフレーズは“道産子アスリート”だが、一昨年5月、津島健次プロ（45期）との結婚を機に生まれ育った北海道を離れ、生活と活動の拠点を関西に移した。おおらかな人間が多く、時間がゆったりと流れる北海道とは対照的に、人々が気ぜわしく行き交う都会での生活には「一生慣れることはないのかなと思うくらい（苦笑）」今も戸惑うことが多いという。

現在の所属先は神戸六甲ボウル。寺下にとっては2018、19年に六甲クイーンズを連覇した験のいいセンターだが、移籍後はまだ優勝に手が届いていない。昨年暮れの全日本女子プロ選手権はトップシードで決勝進出を果たしながら、3位から勝ち上がってきた“帰り新参”の土屋佑佳を相手に優勝決定戦、再決定戦ともに敗れ、悔しい準Vに終わった。

「去年は予選落ちも多くて、全日本前のポイントランキングは第1シードの圏外でした。（シードに）残るためにまず8位以内に入ることを目標にしていたので、まさかトップシードで決勝に進めるとは思っていなかったけど、あそこまでいったからには何とかしたかったですね（苦笑）」

最後に優勝したのは2019年のJPBA★SSSカップ（第1回大会）。ボウリングを始めた中1のころからリスタイを愛用してきた寺下だけに、翌20年から施行された補助器具使用禁止の新ルールが以後の停滞の一因という見方もあるが…。

「初戦の女子プロオールスターで5位に入って、素手でもいけるという手応えはつかんだんですが、直後にコロナで試合がなくなって、ボウリング場も長期休業。7カ月くらい投げる機会がほとんどなかったんです。その間ちゃんと練習していたら、もう少し成績も上がったと思いますが、試合がないと投げ込む意欲もわいてこなくて、その時期はモチベーションを保つのが難しかったですね」

▲全日本女子プロ選手権時の寺下。惜しくも3年ぶりの7勝目は逃したが、再浮上のきっかけとなりそうな準優勝だった（22年12月17日、東大和グランドボウル）

姫路麗、松永裕美の現役2トップを超え得る一番手の存在と目されてきた寺下だが、この3年の間に川﨑由意、坂本かや、中島瑞葵らの後続世代が台頭し、これ以上足踏みしてはいられない状況だ。

「優勝することは毎年の目標だけど、去年まではそれを口に出して言えるような状態ではなかった。今年はしっかり準備して、明確な目標にするつもりです」

「将来ママになっても ボウリングは続けます」

今年はデビュー10年目の節目の年であり、8月には20代最後の誕生日を迎える。厄落としというわけではないだろうが、この1月、寺下は“親知らず”を一気に4本抜いた。

「去年の3月、虫歯の治療で歯医者に行ったら『下の2本の親知らずが横向きに生えているので、すぐに抜いたほうがいい』と。時間を空けて1本ずつ抜けばいいと言われたけど、その都度痛い思いをするよりは1回で終わらせたいと思って。抜いた当初は顔が真四角に腫れていました（笑）」

親知らず抜歯後間もなく、寺下は注目のio.LEAGUE SHOWCASEにチーム神戸の一員として出場。最終日のポジションマッチでチーム千葉に敗れて2位に終わったが「小・中とバスケットボールをやっていたので、久しぶりのチーム戦は楽しかったです」と笑う。

▲Io.LEAGUE SHOWCASEに神戸チームの一員として出場。「カレントスコアのチーム戦は、これまでとは違ったボウリングの魅力が（ファンに）伝わるんじゃないかと思う」（1月12日、ボウルアロー松原店）

そして迎えた今季初戦のKUWATA CUPプロ部門JPBA大会は、準決勝で敗退（総合7位）して東京体育館行きの切符は逃したものの、1次予選30位→2次予選10位→準々決勝8位と順位を上げていった戦いぶりが次戦以降に期待を抱かせた。

「初日前半の内容がよくなかったのが反省点ですが、2日目はカラダがしっかり動いて追い上げることができました。いいスタートが切れたと思うけど、やっぱり東京体育館に行って桑田さんとお会いしたかったですね（笑）」

富士登山にたとえると、6勝している寺下の現在地は6合目。登頂（10勝）までの道のりをどのように思い描いているのだろうか？

「結婚3年目ですが、将来ママになってもボウリングは続けます。すぐに子供がほしいというわけではないので、少なくともあと3年はボウリングに集中して、10勝してから産休に入るというのが理想です（笑）」

寺下プロと一緒に投げよう！ 近日開催のチャレンジマッチ

神戸六甲ボウルでは下記の日時で寺下プロのチャレンジマッチ（4G／参加料3200円。センター会員は400円割引）を開催予定。皆様のご参加をお待ちしています。

- ●2月15日（水）20：00～
- ●2月16日（木）20：30～
- ●2月18日（土）10：15～
- ●2月22日（水）20：00～
- ●2月28日（火）13：30～

てらした・ちか／1994年8月16日生まれ、北海道出身。157㌢、右投げ。血液型O。2014年プロ入り（47期／ライセンス№507）。優勝6回。22年度ポイントランキング13位、アベレージ208.97。P★League優勝6回（シーズン優勝2回）。神戸六甲ボウル／サンブリッジ所属。

KUWATA CUP 2・26 東京体育館決勝大会進出プロが決定！

▲左から大嶋、岩見、坂本の女子プロ3名。岩見はプロ9年目にして初の決勝進出が東京体育館特設レーンの晴れ舞台に！

ボウリングをこよなく愛する音楽界のスーパースター・桑田佳祐氏が旗振り役を務める注目のビッグトーナメント「KUWATA CUP2022→2023～みんなのボウリング大会～」のプロ部門JPBA大会が1月24・25日の両日、男子は品川プリンスホテルBC、女子は東京ポートボウルにて行われ、右表の男女各3名がきたる2月26日、東京体育館特設レーンで開催される決勝大会への出場切符を獲得した。

138名がエントリーした男子大会は、2日間で9個のパーフェクトが飛び出すハイスコアの打ち合いに。そのなかで300点を2度マークし、251.30と驚異のアベレージでトップ進出を決めた**山本勲**以下、**小林哲也**、**斉藤琢哉**とレフティー3名が勝ち残った。

一方、94名で争われた女子大会は、こちらもレフティーの**大嶋有香**がひとり230点台のアベレージで1位進出。2位以下は混戦となったが、予選時から僅差で大嶋に食らいついていた**岩見彩乃**と**坂本かや**が、準決勝最終Gで278を打った桑藤美樹の追撃を振り切り、晴れ舞台にコマを進めた。

なお、アマ部門のファイナル進出者を決める準決勝大会は2月25日、プロ部門と同じ2会場で開催される。

KWATA CUP2022→2023決勝大会進出者

●男子（23G）

順位	氏名	（期別）	T／PIN	アベレージ
1	山本 勲	（44）	5,780	251.30
2	小林 哲也	（48）	5,591	243.08
3	斉藤 琢哉	（48）	5,507	239.43
次	堀ノ内智大	（54）	5,494	238.86

●女子（21G）

1	大嶋 有香	（49）	4,872	232.00
2	岩見 彩乃	（48）	4,764	226.85
3	坂本 かや	（49）	4,750	226.19
次	桑藤 美樹	（45）	4,742	225.80